



# モンゴル訪問団

## 百聞は一見に如かず —ウランバートルの1週間

旅行団幹事 志村照彦

29日 当協会から6月23日(木)にかけてJICAを通じての中国での植林事業は順調に進んでいるが、来年も拡大したいとの矢野会長、八島顧問らの意向と、たまたま会館ビルのテナントにモンゴルの企業が入居したことが重なって、「ひとつどんな所か見に行こうではないか」となったものである。

18名の団員のほとんどはモンゴル初体験。幹事の当方もモンゴルと言えば、ロシアと中国に挟まれている内陸国で、かつては社会主義体制を採つたが、今は民主主義国。古来、遊牧民族であるが、今は豊富な地下資源の輸出が経済を支える。大陸内部にあるため冬期は極寒。13世紀には元寇

29日の1週間、18名がモンゴルを訪問した。きっとかけはJICAを通じての中国での植林事業は順調に進んでいるが、来年も拡大したいとの矢野会長、八島顧問らの意向と、たまたま会館ビルのテナントにモンゴルの企業が入居したことから、所か見に行こうではないか」となったものである。

かつた。

これでは幹事は務まらないの認識しか持ち合わせていなかつた。

で、日本モンゴル協会という歴史のあるモンゴルとの友好団体の門を叩き、講演会に参加したり懇親会で有識者と種々有益な情報交換をしたりして、小生にとってよい刺激を受けた。

さらに5月4日には光が丘公園で開催されたモンゴル・フェスティバル「ハワリンバヤル2



副市長と植樹で会談



清水大使と懇談

出発日の6月23日は午後2時40分成田発のモンゴル航空の直行便で午後7時05分(日本時間午後8時05分)チングスハン空港着。大型バスで市内に向かったが、驚いたのは市内の交通ラッシュ。ぎっしり詰まって動

014」に出かけて、モンゴルサンディッチとビールを立食しながら舞踊ショーを見学、さらにもンゴルと日本のFTAや、地下資源開発と都市基盤整備などのレクチャーを聞き、生きた地域情報に接することができた。



外務省で記念撮影

かない車の列に、広々とした草原の国という先入観が一撃された。フラー・ホーテルという日系の宿に落ち着く。

翌24日は午前中、ウランバートル市役所で緑化の話し合いをするグループ（9名）と市内見学グループ（9名）の2班に分かれて行動開始。

緑化の話し合いは先方のバッエルデネ副市長と矢野会長との話し合いで、今後、事務的に連絡を取りつつ具体的な計画を策定することで合意した。見学

グループは約1時間半、中心部のチンギス広場周辺を散策。ところがその最中、直前まで快晴だった空がにわかに暗くなり、とたんに雨が見えないほど豪雨が降りだした。

一行はたまたまカフェで休憩中だったため、ねれずにすんだが、モンゴルは乾燥した大地で雨は少ないと第2の先入観がここで粉碎された。この雨はほどなくやんだが、その後もしばしばにわか雨が降り、旅行中、傘は手放せなかった。

午後は、現在善隣協会のビル6階に「ナショナル・インヴェストメント・マネジメント」の支社を開設して中央アジア、中国、欧州等の事業を手掛けている「ナショナル投資銀行」を訪問。旧知のバヤラ会長からモン



背後がチンギスハン像

ゴル経済の現状や事業の現状を聞いた。モンゴルでは2年前の国會議員選挙で政権交代が行われ、外国からの投資にあまり熱心でない政権が生まれたため、現在、投資は一服状態だが、2年後の選挙で情勢は変わるだろうということだった。モングルの政情に少しだけ関心がわいてきた。

25日は午前10時に日本大使館に清水大使を訪問、1時間弱懇談。2000人以上を数える日本政府留学生から長岡技術科学大、京都工芸繊維大卒の2人の大臣がいるとのことだった。

続いて11時にモンゴル外務省のバトバヤル政策企画局長と会見。外交政策についてレクチャーを受け、午後2時半よりGreen

Vegetal LLC野菜工場を見学した。ここは日本のLEDによ

る水耕栽培技術を導入してサラダ菜を栽培していた。1日最大3360株の収穫が可能で、なは自社経営のレストランや市場に向けて出荷している由。

4日目の26日はテレルジの草原へバスで移動。5年前に完成した高さ30メートルという世界最大のチンギスハン像がそびえるテーマパークを見物。社会主義時代はソ連（当時）への気兼ねからチンギスハンはタブー



歌を聞く



抑留犠牲者慰靈碑

だつたが、自由化後はチンギスハンが氾濫。ここはその代表例。昼食は豊かな清流のほとりに建つモンゴル唯一の5つ星ホテルで。ただし食卓は庭のテントの中。山間の周囲は緑も多く、ホテルを取り巻く山あいの佇まいはどことなく長野県上高地の梓川の流れや日本の高原の風情を思わせるものがあった。

この夜はモンゴリア・ホテルといふモンゴル伝統のゲル（フェルトの円形テント）やラマ教の寺院建築の客室が味わえる宿。野外でキャンプファイヤーを焚きながら馬頭琴、ホーミー、長歌、舞踊を見物しながらガチュールの夕べを楽しんだ。特にモンゴルでは昔からの習わしとして精霊を呼び出したマニズムが受け継がれており、呪いを解いたりするシャーマンの儀式のパフォーマンスが興味深かった。

27日は午後、6階のテナント、ブヤン社のカシミヤのニット製品生産工場を見学。国會議員も務めたというジャガーケンジヤー日本兵慰靈碑を参拝。第二次大戦の敗戦後、モンゴルには1万2000人の日本兵が抑留され、そのうち1500人が命を落とした。この場所にはその半分以上の方の遺骨が納められていたが、すでにそれらはすべて日本に移され、今は慰靈碑に位置し市街地に向かい景色を一望できる。慰靈碑の脇に資料館があり、亡くなられた人々の名前や記録写真等が保管されていて。ここでわれわれも持参のささやかな香華を手向け、犠牲者の心情をしのんだ。

12時半、ウランバートル中国文化センターを訪問・見学。中国大使館の文化担当としてこの春まで東京に駐在していた善隣学院卒の哈斯巴根氏が今、センター長として着任している。矢野会長らと久闊を叙した後、昼食を共にして懇談。

これでモンゴルでの日程は終團員も多かった。

最終日の28日は午前中、ウランバートル市内のダンバダルジヤー日本兵慰靈碑を参拝。第2次大戦の敗戦後、モンゴルには1万2000人の日本兵が抑留され、そのうち1500人が命を落とした。この場所にはその半分以上の方の遺骨が納められていたが、すでにそれらはすべて日本に移され、今は慰靈碑に位置し市街地に向かい景色を一望できる。慰靈碑の脇に資料館があり、亡くなれた人々の名前や記録写真等が保管されていて。ここでわれわれも持参のささやかな香華を手向け、犠牲者の心情をしのんだ。

わり、29日無事帰国。フレルバートル駐日モンゴル大使は当協会での講演で「モンゴルは古くて若い国」と言われたが（『善隣』4月号掲載）、短い見聞でもあの国は今、生き方を模索する変化の最中にあることが感じられた。協会ではこの秋から若手研究者を招いて、モンゴルについての講演シリーズを実施するが、多くの会員がモンゴルに興味と関心を寄せてくださることを期待したい。



慰靈行事